



るか後の1960年代に現実化することにおいて、現代建築の系譜のルーツとなっていた。サンテリアほかイタリア未来派の建築家が描いたスケッチ・プランは、今日、すべて実現されてしまっている。このように、印象派を起点とする20世紀の「前衛芸術」の運動一般が、旧来からの大芸術の制度を打ち破り、「芸術」と「日常」の関係を回復していく企図をもっていたとすれば、未来派は、立体派や表現主義のもっていたドメスティックな空間の限界を凌ぐ構想を秘めていた。

一方1916年、表現主義者から立体派・未来派の開拓者たちまでが集まったチューリッヒのキャバレー・ヴォルテールでの集団実験は、ほどなく「ダダイズム」と名付けられるのだが、彼らは、詩や文学、音楽も含めた「日常的関心の彼方にある実験の演劇」（フーゴ・バル）を渴望していた。詩と絵画、音楽の結合によって、これまでの「日常」生活を批判し、新たな芸術と日常との結合を欲していた。1915年の「未来派総合演劇宣言」にもみられるように、各ジャンルの同時発生性を受けとめる空間＝場に価値をもたせ、そこでの意味の説明は不要であって、しばしば寄席芸的な即興性をも正当化するものだった。

この同時代性は、ロシア革命（1917）直前の、ロシア構成主義の画家E・リシツキーやM・ラリオーノフたちもそうであった。K・マレーヴィチは1915年の著書のなかで、自分の作業を、「形態のゼロのなかで変身して、アカデミックな芸術の掃き溜めから抜け出し、その新たな絵画の形態のリアリティは、まさに無から生じた形態による構築性を明かしている」と書いたように、描く具体的な対象性を放棄して、まったく「無対象」の絵画に到達していた。ここには、機械的でアクロバティックな絵画思考の飛躍がみてとれる。

また1917年、オランダのエトレヒトから立ち上がった「デ・ステイル」グループの初期メンバーの一人だったP・モンドリアンは、都市と自然の存在を等価と見做し、芸術のための「芸術美」ではなく「生活美」を追求する意図の下に、水平線と垂直線による幾何的抽象画へと歩みだしていく。

「第一機械時代」と呼ばれた20世紀初頭の四半世紀は、19世紀の蒸気エンジンに象徴される熱エネルギーから、電気を家庭に送るエンジン動力に象徴される、人間のスケールにあった小型で簡単に操作できる機械に変わり、日常生活に浸透していった。その技術革新は、第一次大戦で広く使われた機関銃の発明(B・ホッチキスの考案)に具現化され、そのスピン・オフが家庭用品として出回っていく。戦争は機関銃によって、それまでの肉薄する接近戦から大量殺戮戦に転換し、その対抗手段として塹壕戦がみだされる。また戦車が開発された。英軍が戦車を実戦に初めて登場させたのは1916年のことだった。

ドイツ表現主義の中心メンバー、A・マッケとF・マルクは本大戦で戦死し、表現主義は潰えた。1915年6月、マルセル・デュシャンはフランスからアメリカ行きの「ロシャンボー丸」に乗り込み、ニューヨーク前衛派に熱狂的に受け容れられ、17年のアンデバンダン展にレディメイド作品《泉》を出品したが、委員会から陳列を拒否された。

[Photo Credit]

22—©ADAGP, Paris & SPDA, Tokyo, 2000